

# ガバナー補佐自分を語る

## 「ロータリーと私」

国際ロータリー第2510地区  
第4グループガバナー補佐

古野 重幸 (札幌RC)



### □ロータリークラブとの出会い

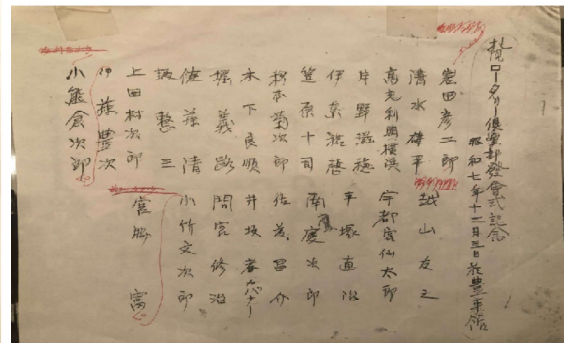
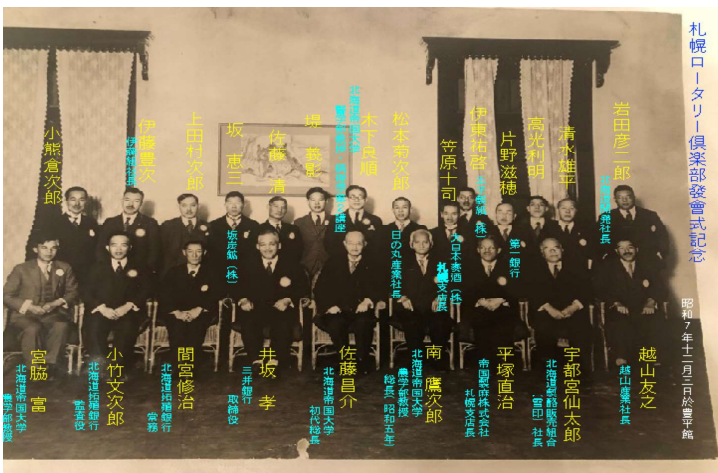
私は夕張郡栗山町生まれ。高校時代まで栗山町に住み、高校は岩見沢東高校。嵯峨パストガバナーの後輩です。D52やC62の蒸気機関車で通っていたのですから随分昔の話です。

父、元一郎は栗山RCのチャーターメンバー。平成2年9月に2度目の会長職を務めた後、63歳で亡くなりました。父はロータリークラブが好きで、東京へ出張に行くときにも常にロータリーバッチを着けていましたし、ロータリアンであることに誇りを持っていたと思います。昔は夫人や家族同伴の行事が多く、四人兄弟の長男である私はよく父に連れられてロータリーの行事に参加した記憶があり、それが私のロータリークラブとの出会いです。

札幌RCでも今は12月初めに行われるクリスマス家族会だけが家族同伴の行事ですが、年々家族の参加が少なくなっており寂しく感じます。ロータリークラブの輝きは家族から見ても失われつつあるのでしょうか。私は2018-2019年度に会長を務めました。私はどんな役職を受けるときにも可能な限りその組織の過去の資料を読むことにしています。その時も入会以前に発行された30年史40年史50年史を通読しました。昔の記念誌は実に詳細に記述されており、ロータリーの歴史と共に昭和史を読む感覚でした。昭和12年5月15日から札幌RCがホストする第一回目の地区大会が開催され、30周年誌には次のような記述があり、まるで映画のワンシーンのようで深く印象に残っていますのでご紹介します。

また、90年前に札幌RCが設立された時の記念写真も添付しますのでご覧ください。

「その前日、午後1時28分、上野特発のロータリーアン列車は札幌駅到着。佐藤男爵（初代会長）はじめ札幌RC会員家族総出の出迎え、旧知未知、たちまち親愛と交友は温かく流れ、早くもロータリー精神は発揮された」



□人生を変えた交換留学

1974（昭和49）年、私が16歳で高校1年生の時にこの第2510地区から交換留学生としてオーストラリアに派遣していただきました。1豪ドル400円の固定レート時代です。受け入れクラブの決定が遅れ、その時には当時岩見沢RCの柿本ガバナーには大変お世話になりました。私が行った町はビクトリア州のRobinvale。エリア人口3000人の小さな町で葡萄やオレンジ、オリーブ等果物の栽培が主な産業。シドニーで100人に聞いても、たぶん一人も知っている人がいないような所です。5軒のホストファミリーにお世話になりました。洋品店と衣料品の経営者、会計士、牧師、葡萄農家。どの家族も大変親切で、それぞれに色々と忘れられない思い出があります。以来約45年間、つい数年前まではすべての家族とクリスマスカードのやり取りが続いていましたし、双方の行き来も何度もありました。下の写真は最初のホストファミリーであったArnottさんご夫妻が日本を訪れた時に栗山町まで足を延ばしてくれて、栗山小学校で特別授業を行った時のものです。



このような交流は他にも沢山ありますが、最後にもう一つだけ紹介させて下さい。2008年にRobinvale RC（現在は隣のクラブと合併しRobinvale-EustonRC）から創立50周年記念パーティーの招待状が届きました。設立は1958年、偶然にも私の生まれた年だったのです！

私は妻にも私の第二の故郷を見せたいという思いと、何よりもあの時の1年があって今の自分があるんだという感謝の気持ちを伝えたく二人で参加。その式典では前述のLen Arnottさんともう一人のホストファザーであるJohn Foxさんがロータリー奉仕50年の表彰を受けました。下の写真は2008年6月30日のOcean Grove RCの例会「Change Over Night」に参加した時のものです。左から妻、私、Jan、John、長男David。Foxさんはその時Robinvaleを離れ、メルボルンから1時間ほどのOcean Groveに移り住んでいました。この時の例会が大変楽しかったので、私が会長の時に昼間の最終例会をタイトルもそのまま「Change Over Night」として、新旧交代の夜間懇親例会に変えて行いました。



高校1年の時のこの特別な経験がその後の自分の歩みに大きなプラスになりました。もしその1年がなければ、全く違う人生になっていたと思います。私はロータリーの公式標語「One Profits Most Who Serves Best」は実に英語らしい表現で、かつロータリーの精神を端的に表していると思います。私は逆に奉仕する前に多くのプロフィットを得た訳です。どれだけ出来るか分かりませんが、少しでも恩返しをしなければと思っています。

#### □ロータリーの今後

出稿依頼は1000字から1200字とありましたが、既に1800字を超えました。確か紙ベースではないので、何字でもいいからという石丸ガバナーのお言葉に甘えて、私が思う今後のロータリーについて勝手な意見を申し述べさせていただきます。ご存じの通り国際ロータリークラブは100年以上の歴史の間に、最初は親睦から始まり、その上に職業奉仕の概念を重ね、その二つを土台として「社会奉仕」、国際奉仕、「青少年奉仕」の3つの柱を立てて立派な家を築いてきました。私は日本におけるロータリークラブは世界がどうであれ、原点に戻る、つまりもう一度親睦と職業奉仕にフォーカスすべきではないかと最近思うようになりました。言い換えると、例会にフォーカスするという事です。RIが求める活動は近年多岐に渡り、かつ複雑化し、結果として各ロータリークラブの負担になっていることはないでしょうか。私は昨年度情報委員長として27名の新入会員にオリエンテーションを行い、ご批判もあるかと思いますが、「ロータリークラブは奉仕する団体ではなく、奉仕する人々の集まり」であると伝えました。だからこそ例会が一番重要。例会の前半は食事をしながら親睦を深め、後半の卓話は奉仕の勉強をする自己研鑽の時間。ワンセットなので途中退席はしないで下さいと、当時玉井地区職業委員長がガバナー月信に寄稿された「重要な40パーセント」のコピーを必ず渡します。私たちは国際ロータリークラブの会員ではありません。時代の変化に応じて、それぞれの国や地域に合った活動の在り方があっても良いのではないのでしょうか。そんな単純な問題じゃないですよという声が聞こえてきます。しかし、見た目は後退でも、元気を取り戻す道であれば一考する価値があると思います。

長年続けてきたホストファミリーとのクリスマスカードの交換を2年前にやめたのは、お世話になった方々の訃報が次々と届き、悲しいかなもうほとんどご存命でないからです。しかし、Foxさんの息子さん家族との交流は続いています。来年5月のメルボルンで開催される世界大会には久しぶりに家族も連れて行く予定にしています。Foxさんご夫妻のお墓参りをして、その後息子さんたちとゴルフやワイナリー巡りを楽しもうと思っています。